

—— テーマ ——

青少年の生きる力を育む 教育プログラム

福岡県・つくし中央ライオンズクラブ

#青少年

#LCIF



 シェア 0

 ツイート

 LINEで送る

動画を見る

ライオンズクエストは、青少年の生きる力を育むことを目的とした教育プログラムで、1975年に設立されたアメリカのクエスト・インターナショナルにより開発された。84年にはクエスト・インターナショナルと提携したライオンズクラブ国際協会が普及活動に乗り出し、プログラムの国際化が進展。2002年にライオンズクラブ国際財団（LCIF）がプログラムの権利を取得してからは、ライオンズを代表する青少年プログラムとして世界中で展開されている。日本では01年4月に、埼玉県川口市立芝東中学校がパイロット校となり、日本で初めてライオンズクエストを取り入れた授業を開始。現在では日本各地の学校で活用されている。

ライオンズクエスト・プログラムは、家庭、学校、地域の中で日常生活を送る子どもたちが自分の意見を持ちつつ、友達や周囲の人たちとうまく協力して、自分らしく行動する力を身に付けられるように構成されている。中でも、コミュニケーション能力や感情対処、問題解決、目標設定といったスキルを身に付ける「ライフスキル」の学習が中心となっている。

ライフスキルとは簡単に言えば、人間関係やストレスなど、日常生活で直面するさまざまな問題に、適切に対処するのに必要な能力のこと。親など周囲の人の行動を見て次第に身に付けていったりするもので、学習や経験によって獲得可能な能力だとされる。

ライオンズクエストの授業では、まず最初にその日の授業のテーマにあった名言名句「今日の言葉」を先生が紹介。最後には「振り返り」のワークシートで授業内容をおさらいする。目的意識を植え付け、更に繰り返すことによって学習効果が上がるよう工夫されている。そして授業の中で、何よりも目立つのが「生徒たちによる積極的な発言」である。



ライオンズクエストでは、発言に関して間違いというものがないため、生徒たちはお互いに意見を言いやすい。そのため生徒同士のコミュニケーションが増え、クラスの雰囲気良くなり、生徒それぞれの発表の仕方や聞き方がうまくなるといった変化が見られる。無口で普段あまり目立たない生徒たちにも発言の機会が与えられるので、他の授業で見せないような積極性も見られるようになる。

また、このプログラムでは、こうした生徒の心の教育を推進する一方で、「ワークショップ」と呼ばれる教師用の研修にも力を注いでいる。ワークショップは、プログラムを実施する指導者が、授業を疑似体験し、ライフスキル教育への理解を深めるためのものである。

人が変わる場合、他人から言われて変わろうとするより、自分で気付いて主体的に変えようとする方が変わるのが早いし達成しやすいもの。それは大人（教師）も子ども（児童・生徒）も同じで、考えるきっかけを与え、主体的に変わるチャンスを与えるのが、ライオンズクエスト・プログラムなのである。



2011年10月、福岡市でライオンズクエストを紹介するセミナーが開かれた。セミナーにはライオンズクラブの会員の他、多くの教育関係者も参加。その中に当時の福岡県春日市立須玖（すぐ）小学校の小宮都賀最（こみやつかさ）校長がいた。プログラムに興味を持った小宮校長は、当時、福岡地区のライオンズクエスト推進委員だった井手口敬介（現地区ライオンズクエスト委員長）に連絡。井手口委員は所属する、つくし中央ライオンズクラブ（79人）の協力を得て、12年1月に教職員向けのミニ・フォーラムを開催した。結果、参加した教員全員がプログラムを支持し、ライオンズクエストの導入が決まった。

その頃はちょうど道徳が教科化される前兆のあった時期で、従来の学習スタイル見直しの必要性を教育関係者が感じていた時期でもあった。ライオンズクエストは将来生きていく上での術を学ぶプログラムだが、同時に道徳や特別活動なども包括した総合プログラムであるため、頭で理解したことを行動に移す、実践化という部分で、ライオンズクエストの研究された展開のノウハウは、道徳教育推進校でもある須玖小学校にとっては魅力的だったのだろう。

その年の夏、須玖小学校で初のワークショップが開催された。猛暑の中、教職員全員が2日間、エアコンのない多目的ホールで汗だくになりながら受講。つくし中央ライオンズクラブも、初めての事業にもかかわらず、送風機をレンタルしたり、氷の柱を立てたり、冷たい飲み物を絶えず準備したりして暑さ対策に努め、春日の子どものためにと献身的なサポートを実施。常に10人を超えるメンバーが出席し、ねぎらいの声掛けを絶やさなかった。



当時はまだ日本語の小学生版が開発中だったため、中学生を対象としたプログラムを小学生向けにアレンジして2学期から導入。翌年2月には早くも公開授業が行われた。その様子を参観した、つくし中央ライオンズクラブの大村哲也元会長は、「自分の子どもや孫のような世代の先生たちが、生徒たちと一緒に生き生きと授業を進めている姿に感動しました。ライオンズクエストでは、まずワークショップを体験した先生が劇的に変わり、次いで授業を受けた生徒たちが変わるという良い循環が生まれるのです。その結果、明るくて安心出来るクラスが誕生します。そこにはいじめなどは全く発生しないのです」と話している。

その後、須玖小学校の子どもたちが進学する春日中学校から、「須玖小の生徒たちは何かが違う」と須玖小に照会があり、それがライオンズクエストによるものと確信した同中がプログラムの導入を決定。更には同じ中学校区の春日小学校にもその輪が広がり、全国的に見ても画期的な公立校トライアングルでの普及が確立した。

また、須玖小学校では小宮校長から引き継いだ熊谷久子校長がリーダーシップをとり、各学年10時間のカリキュラムを作成、これに道徳とライオンズクエストを融合させた授業案も作り、2017年の2学期から実践されている。
取材協力／福岡県春日市立須玖小学校、篠田康人ライオンズクエスト認定講師

2018.02更新（取材／鈴木秀晃 写真・動画／田中勝明）



— 奉仕活動 —

1泊2日、普段会わない人たちと。アグリパークで調理などを体験

新潟西ライオンズクラブ

#青少年



 シェア 0  ツイート  LINEで送る

 動画を見る

2017年12月25日から26日にかけて、新潟西ライオンズクラブ（五十嵐敦会長／56人）は第29回子ども会1泊3食わくわく農業体験inアグリパークを開催した。これはクラブが毎年夏に行っている、市内の小学校3年生から6年生を対象とした青少年健全育成事業だ。2017年も8月に実施を予定していたが、台風の接近によってやむなく中止。小学校の冬休みに当たる12月の終わりのこ

の時期に延期して実施することにした。元々、この事業は近くの寺でのおもちゃ作りと座禅体験という内容で実施していた。しかし、参加してくれる子どもたちが多く、寺にとっても負担が大きくなってしまったため、アグリパークが出来てからは場所をこちらに移し、さまざまな体験をしてもらっている。今回は冬の開催となったため、農業体験ではなく、食事やお菓子作りなど室内の体験をメインのプログラムに変更した。

学校区を超え、さまざまな学年の子どもたちが参加するというのがこのプログラムの特徴だ。ライオンズのメンバーも子どもたちと一緒に活動するため、普段はなかなか接する機会のない人たちとの交流体験を持つことが出来る。一泊を共にするので、ただ知り合うだけではなく、距離もぐっと近づく。最初はぎこちなくとも、2日目にはメンバーと子どもたちの距離も近くなり、共同作業もスムーズになっていく。



初日は16時15分から開会式とオリエンテーション。17時からは早速夕食を作る。こうしてコミュニケーションをとった後に入浴。そして、20時からはお楽しみ会だ。メンバーもマジックを披露したが、肝心なところの前にネタがバレてしまい、子どもたちから指摘されてしまった。しかし、それらを含めて子どもたちは楽しんだ様子で、お楽しみ会は大盛り上がり。翌日も話題に出るほどだった。

子どもたちの就寝場所は班ごとに分かれたコテージ。大人は近くのコテージで就寝し、何かあった時に備えているが、介入はしない。子どもたちの交流を考えてのことだ。

2日目は7時に起床。7時30分からは全員でラジオ体操をする。朝からの雪で、残念ながら予定していた散歩は出来なくなってしまったが、子どもたちは元気いっぱいだ。朝食はみそ汁とおにぎり。食器の用意や、洗い物まで含めて、全員で手分けして取り組む。

続いてカップケーキ作りを体験。みそ汁に比べて少し複雑な工程が含まれていたが、全員で力を合わせて作っていく。小麦粉や卵を混ぜた生地の上に小さいチョコレートクッキーを乗せオーブンへ。

カップケーキを焼いている間は、チャイルドラインについてのティッシュを配り、説明をする時間に充てる。チャイルドラインは18歳までの子どもが匿名で相談が出来る電話サービス。話す内容は自由で、全国のボランティアにつながる仕組みになっている。クラブではチャイルドラインの支援も行っており、子どもたちが困った時にこの電話の存在を思い出してくれるように、説明することにした。



カップケーキを食べた後は畜舎でのえさやり体験だ。牛やヤギと直接触れ合うことが出来る。入り口にはメンバーが立ち、子どもたちに足下の消毒と手洗いを徹底させていた。えさやりの後はアグリパークの職員が牛やヤギの生態や、雑学をクイズ形式で披露。牛が1日に20kgもの牛乳を出すことを紙パックで表した際には、子どもたちは皆驚いていた。

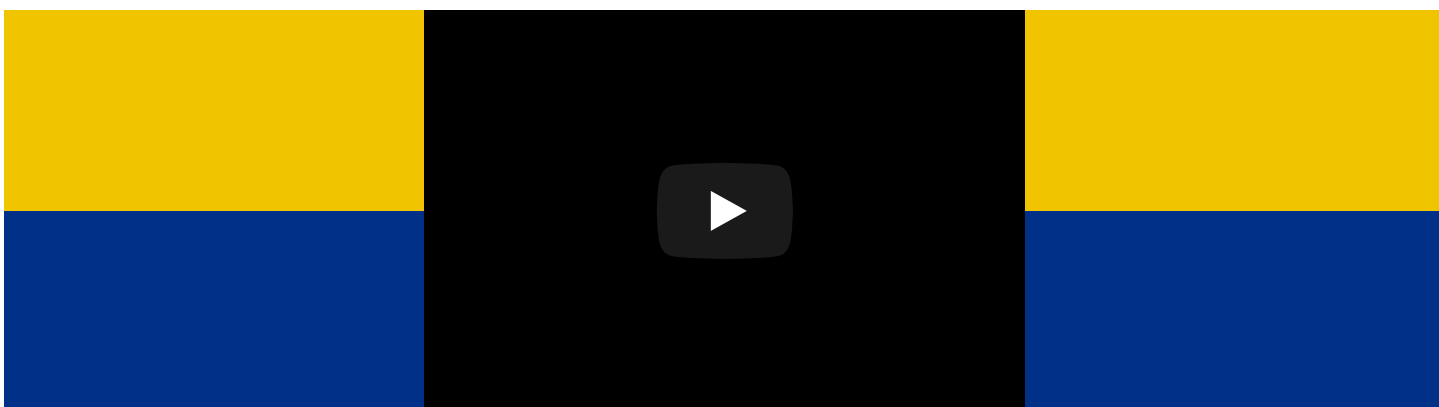
最後は米粉を原料としたピザ作り体験。ピザ生地を伸ばした後、ソースを選び、野菜や肉をのせていく。最後にチーズをかけて石窯で焼かれるピザは、世界で一つだけのピザだ。



これが終わると閉会式。2日間というわずかな時間だが、共に過ごした新たな友達との別れの時間だ。笑顔でさよならを交わす子どもたちの、ちょっと成長した表情に、迎えに来た親御さんたちも少しびっくりしていた。

夏の実施が台風で取りやめになり、クラブでは中止にすることを検討していたが、冬の実施に踏み切り大成功。子どもたちが集まるのかという心配も杞憂に終わった。何度も参加してくれる子も多く、子どもたちにとっては大切な思い出となっている事業だ。いつか、この事業を体験した子どもたちが大人になり、一緒に運営側に回ってくれることが、クラブの夢である。

2018.02更新（取材・動画／井原一樹 写真／関根則夫）



[シェア 0](#) [ツイート](#) [LINEで送る](#)

[Previous](#)

[Next](#)

— 奉仕活動 —

年に一度の出前授業で 手作りの昔遊び体験を

徳島県・上板ライオンズクラブ

#青少年



f シェア 0

t ツイート

LINE LINEで送る

 動画を見る

屋外で遊ぶ機会がめっきり減った現代の子どもたちに、外で遊ぶ楽しさ、遊ぶ道具を自分で作る楽しさを経験させたいと、上板ライオンズクラブ（河野和明会長／32人）では16年前から「出前授業」の活動を行っている。この出前授業の目的は、学校としての実施が難しい安全教育を行うことにある。一つ間違えば凶器になるが、正しい使い方を身に付けさえすれば生活を便利にしてくれるナイフを使用し、命の大切さを教えながら手先の器用さを鍛え、遊びの面白さを体験してもらうという活動だ。具体的には、竹とんぼや紙玉鉄砲、竹にひもを通して下駄のように履いて遊ぶ竹ぽっくりといった竹を削って遊具を作る他、コマや凧、折り紙などの作り方、遊び方などを教えている。

活動が始まった当初は昔懐かしいおもちゃ作りを体験する単発の講座だったが、5年前から上板町内にある四つの小学校の全年を対象とした授業として年間指導計画に組み込まれるようになった。これが実現したのは、クラブに在籍する元校長や教員メンバーの尽力によるところが大きい。学校教育に精通していることから、教育方針に沿った提案を行うことが出来たのだ。全部で15種類ほどある遊びを難易度で分け、各学校の学年ごとに希望を聞き、年間スケジュールを作成する。出前授業は年に25～30回あり、1回につき講師役の他に3～4人のメンバーを集めなくてはならない。平日の日中に行うアクティビティである上、希望が同じ月に集中することもしばしばで、参加メンバーの調整だけでもなかなか大変だ。更に、小学校3年生には「昔の遊びと暮らし」という単元があり、この授業にも、昔の暮らしぶりをよく知るライオンズのメンバーが講師役として駆け付ける。また最近では、参観日に臨時の出前授業を依頼されることもあるなど、活動のニーズは広がりつつある。



年の瀬も迫りつつある2017年12月15日、町立東光小学校の6年生が出前授業で竹とんぼ作りに挑んだ。1時間目と2時間目の2コマを利用して、前半で竹とんぼを作り、後半には校庭に出て飛ばす。授業はライオンズの自己紹介から始まった。相手は1年生の時から毎年出前授業で顔を合わせていることもあって、既にメンバーとは顔見知りだ。

「用事があって学校を訪ねた時も児童が名前を呼んで寄って来てくれるんです。年に1回の出前授業ですが、顔と名前を覚えてもらえるのがうれしいですね。この学校の6年生は今回が最後の出前授業。小さかった子がいつの間にか私の身長を追い越しているのを見ると、感慨深いものがありますよ」と、この活動を担当する青少年・LCIF・ライオンズクエスト委員会の日比生永子委員長は目を細める。

作業開始を前に、作る手順、ナイフを安全に使用するための注意点を説明するのは、出前授業の生みの親であるメンバーの三宅昇。子どもの頃、外で遊ぶ時にはいつもポケットにナイフを入れ、竹細工などをしていたという。説明の後、グループに分かれた子どもたちの元に竹とんぼの材料が配られた。材料の真竹は、ライオンズのメンバーが山で切り出して用意した。子どもが作業をしやすいようにと、あらかじめ竹を粗く切りそろえ、後は羽と芯棒をナイフで削って仕上げるだけという状態まで下準備を施してある。生まれて初めてナイフを使う子ばかりなので、ここまで用意しておかないと楽しさも半減してしまうだろうという、ライオンズの配慮だ。



最初はナイフの開き方も分からなかった子どもたちだったが、時には見本として配られた完成品をじっと眺め、グループごとにつくメンバーの手を借りながら、慣れない手つきで竹を削っていた。最後に紙やすりをかけ、色を付けると世界に一つだけの竹とんぼの完成だ。全員の片付けが終わると、担任の先生の合図で、子どもたちは出来たばかりの竹とんぼを手に我先にと校庭に飛び出した。うまく飛ばすコツは、竹とんぼ自体のバランスが整っていることと、勢いよく右手を前方に押し出すこと。軸がズレていたり、羽を逆さに取り付けてしまっていたりで、なかなかうまく飛ばすことが出来なかった子どもたちだったが、何度か飛ばすうちに竹とんぼが空を舞う時間も長くなってきた。最後に全員で滞空時間を競い合っ出前授業は終了となった。

学校ではナイフを使う機会がないため、子どもたちが初めてというのは分かるが、実は担任の先生もナイフを使って竹とんぼを作るのは初めてだったそうだ。

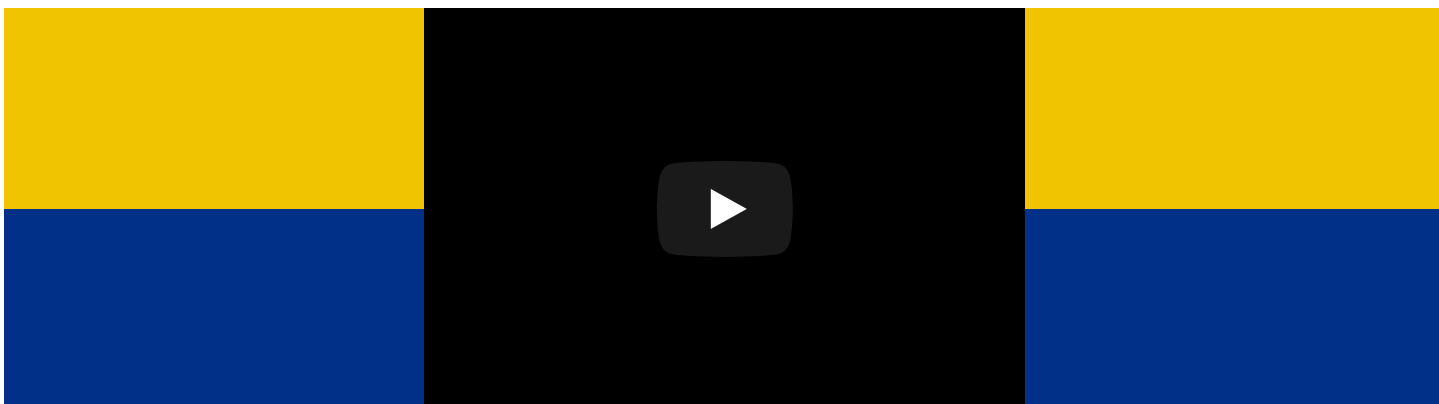
「最初はナイフが怖くて、子どもたちも私自身もどうなることかと思っていましたが、だんだんものづくりの楽しさを感じるようになってきました。自分で作って自分で工夫する楽しさは教科書では勉強出来ないこと。地域の大先輩方に教えて頂くことが出来て、子どもたちも良い経験になったと思います」



現代の子どもたちは、生まれた時からテレビやDVD、ゲーム機が周りにあるのが当たり前の環境で育つ。また、凶悪な事件に巻き込まれる危険を避けるため、昔に比べ屋外で遊べる範囲も限られている。そんな事情もあって、自然物を使って遊び、友達と達成感を共有するような経験はほとんどない。

「ナイフで何かを作って遊ぶという経験はなかなかないと思うので、こういう機会にナイフは危ないけれど便利で役に立つものだということを教えたいし、出来た時のうれしさも伝えていきたいと思っています。上板の子は素直で、聞く耳を持ってくれているのでやりやすい。期待してくれているのがひしひしと伝わって来ますから。私たちも教えながら子どもたちから元気をもらっているんですよ」（日比生委員長）

2018.02更新（取材・動画／砂山幹博 写真／関根則夫）



— 奉仕活動 —

初詣で多くの人を訪れる 鵜戸神宮に寄贈したベンチ の清掃と維持活動

宮崎県・日南ライオンズクラブ

#地域



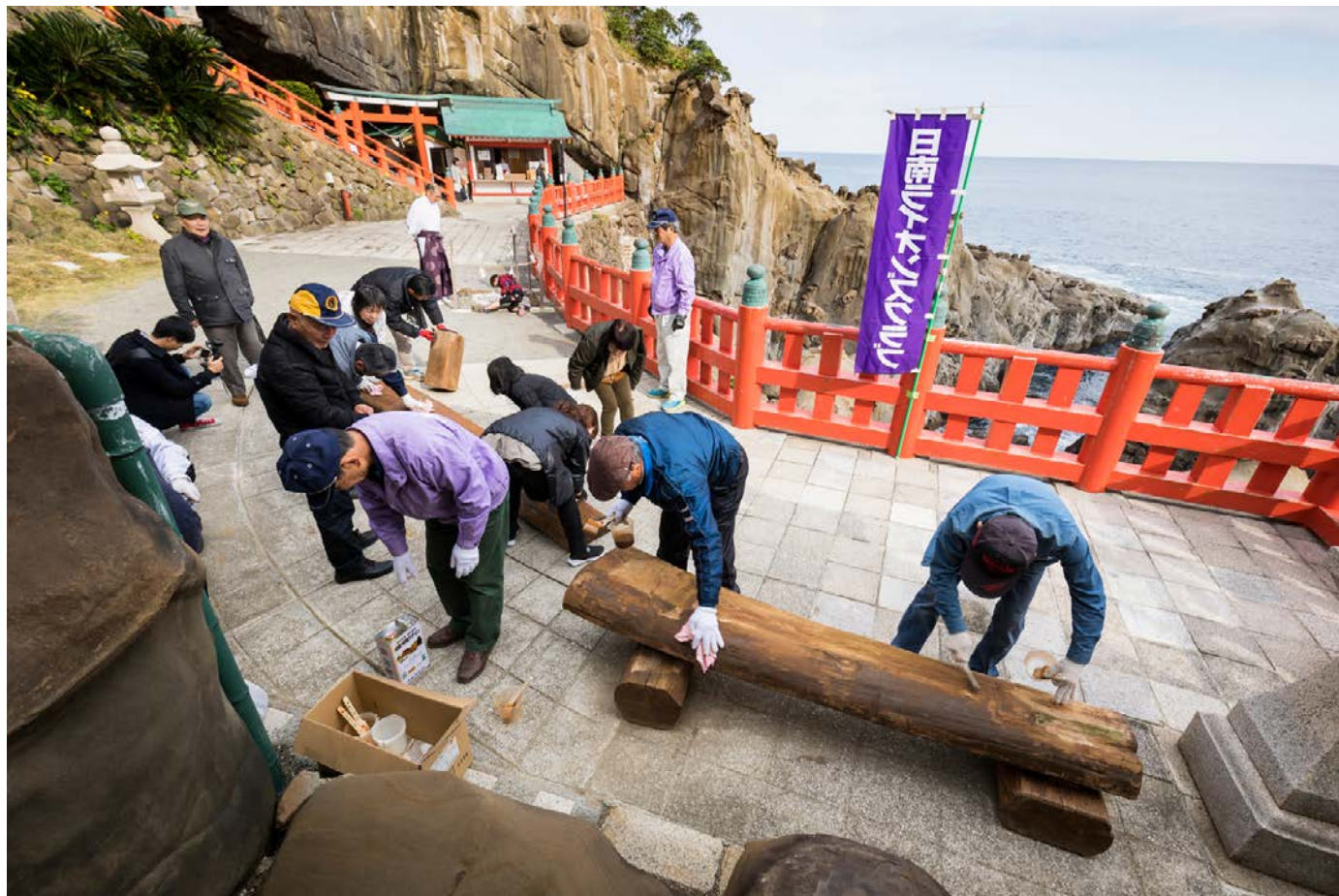
 シェア 0  ツイート  LINEで送る

 動画を見る

宮崎県南部に位置する日南市。1950年に4町村の合併により誕生し、その後もいくつかの町村が編入し、発展してきた。合併によって生まれたため、地区によって違った風土があり、多様性のある市となっている。

そのうちの一つ、鵜戸地区には、県内外から多くの人を訪れる鵜戸神宮がある。岩窟内に建てられた本堂は極彩色で県の有形文化財に指定されている。本殿前にあるのが、『古事記』などに登場する女神の豊玉姫が海神宮から来た際に乗ってきた亀が石になったとされる亀石だ。石の頂に枅形のくぼみがあり、「運玉」と呼ばれる玉を投げ入れることが出来れば、願いが叶うとされている。このように、県外の人からはパワースポットとして人気があり、地元の人にとってもなじみが深い場所である。

そんな鵜戸神宮に日南ライオンズクラブ（山口和彦会長／25人）がベンチを寄贈している。最初に寄贈したのは1994年のことだ。現在、社務所側の入り口近くと、本堂の近くの2カ所に設置してある。材料は日南市の特産である飴肥杉（おびすぎ）を使用した。古くから造船などに使われており、雨風にも耐えられる性質を持った飴肥杉と言えど、次第に劣化は進む。そこで、1999年には防虫剤を注入したものを新たに寄贈した。それでも定期的なメンテナンスは欠かせない。



そこでクラブでは毎年年末にベンチの塗り直しと、周辺の清掃を実施している。2017年は12月10日に行った。

晴天の下、手順を確認した後、作業を開始する。毎年塗り直していても、ベンチには傷が増えていく。多くの人に使われている証拠だ。傷には風で飛んだ小石が詰まっているので、まずはその小石をかき出さなければならない。これがなかなか大変な作業だ。ずっとしゃがんだ姿勢なので腰も痛くなるが、メンバーは懸命に小石をかき出していく。こうして小石がなくなれば、次はぞうきんがけだ。防虫・防腐剤の塗り直しの前にベンチを綺麗にしていこう。塗り直しははけで丁寧に行う。丸太を使用した大きなベンチであるため、面積も広い。下の方は塗りにくいところもあり、苦勞する作業だ。塗り終わった後はベンチの周囲をヒモで囲い、「ペンキ塗り立て」と注意書きをつける。そのままの状態3日ほど乾かせば、完成だ。

活動にはメンバーの家族も一緒に参加する。子どもたちも真剣に小石を取ったり、ぞうきんがけをしたりしていた。家族ぐるみでの奉仕活動をする貴重な機会でもあり、同時に、地元の人にとってシンボリックな場所の清掃活動はメンバーにとって誇りに思える活動だ。

日南ライオンズクラブが鵜戸神宮に対して行った奉仕活動はベンチの寄贈だけではない。表参道側の入口近くにはジャカラダの木を植樹。初夏には綺麗な花を咲かせ、参道を行く人々の目を楽しませている。



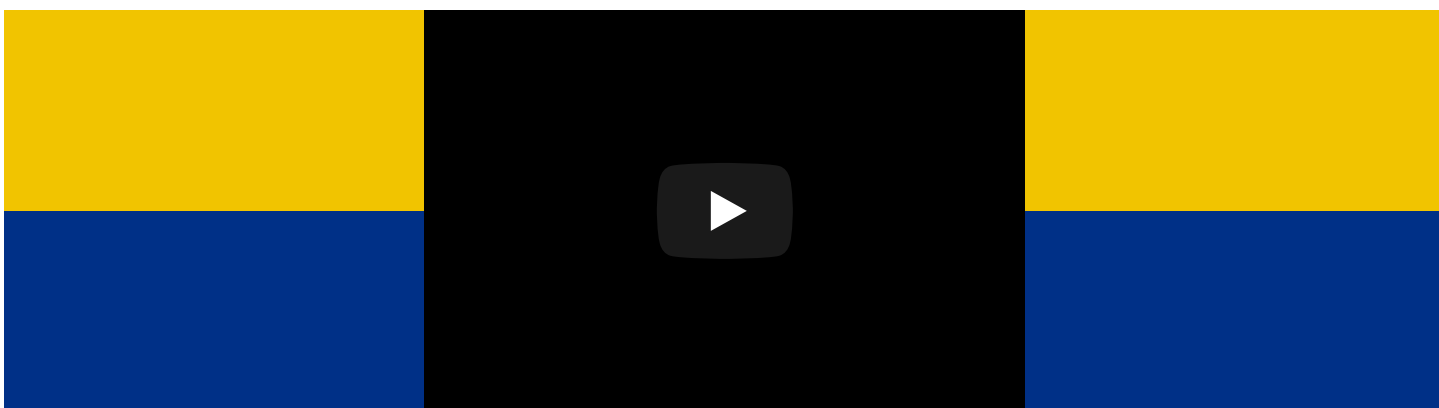
また、鵜戸神宮にある磨崖仏（自然の岩壁や岩に造立された仏像のこと）の説明板も日南ライオンズクラブが寄贈した。この磨崖仏は18世紀半ばに鵜戸山仁王護国寺の第47世の別当隆岳が仏師延寿院に彫らせたもので、1970年11月に日南市の文化財（彫刻）に指定された。車道横の少し目立たない場所にあるため、説明板がなければ、ちゃんと見ようと思う人は少ないだろう。しかし、「ものを寄贈して、それで終わり」というのでは奉仕活動ではなく、自己満足になってしまうという考えから、クラブでは毎年、ベンチの塗り直しに合わせて、ジャカラランダや磨崖仏の周辺も清掃している。



広大な敷地を持つ鵜戸神宮。複数の箇所で維持管理活動や清掃活動をするのはなかなか大変だ。ベンチを寄贈する際も材料を奥まで持って入るのは重労働だったという。それでも今は訪れた人たちに喜ばれるベンチとなっている。

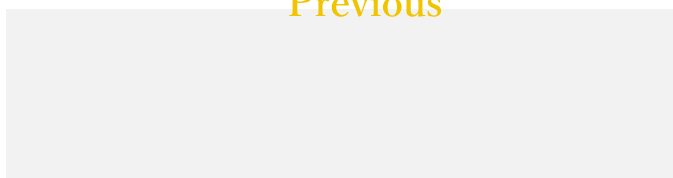
今年も多くの人が鵜戸神宮を訪れ、日南ライオンズクラブの寄贈したベンチに座ることだろう。

2018.02更新（取材・動画／井原一樹 写真／関根則夫）



 シェア 0  ツイート  LINEで送る

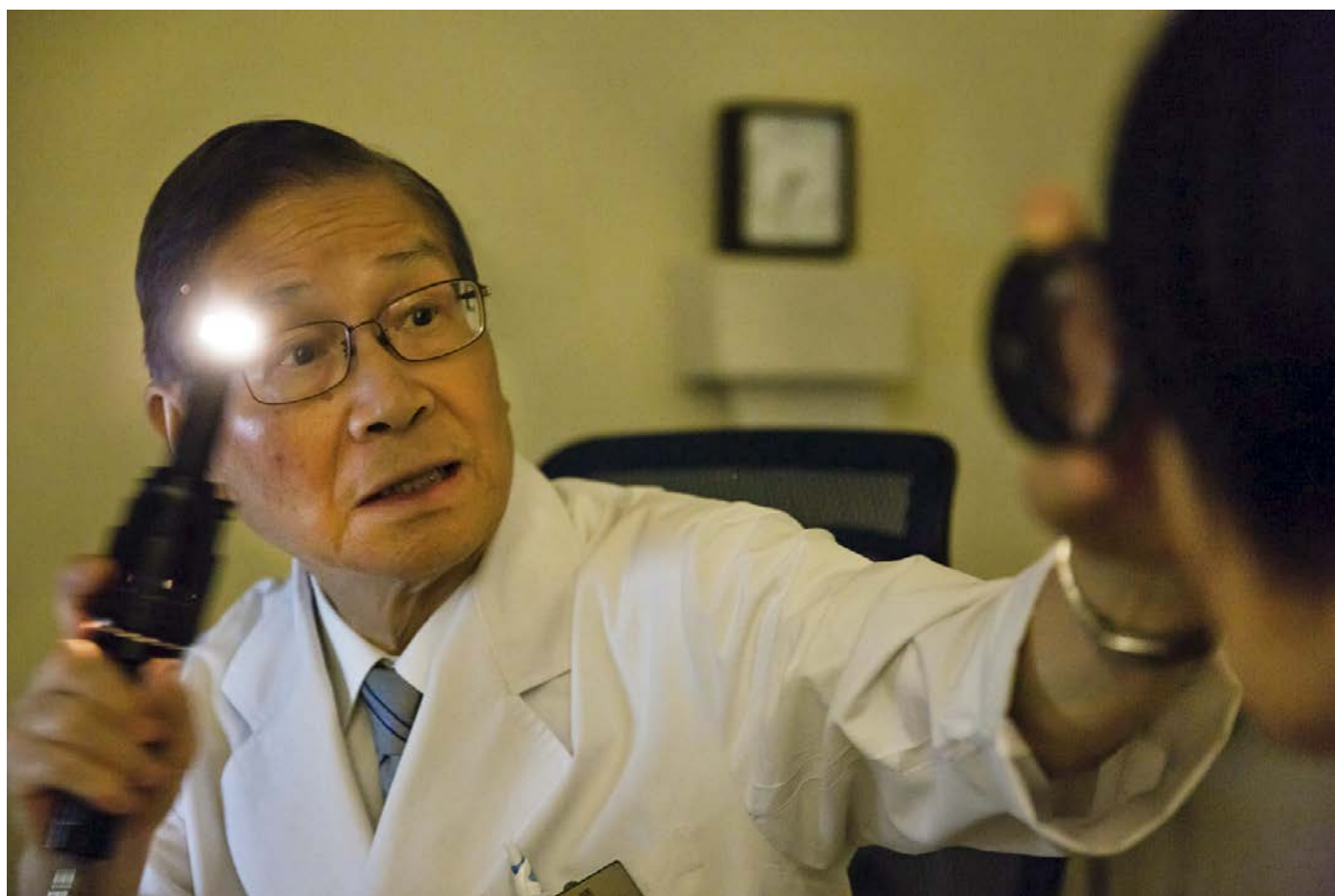
Previous



— フォーカス —

市民の目の健康を守る 無料検診44年

箕田健生（埼玉県・戸田ライオンズクラブ）

[シェア 0](#)[ツイート](#)[LINEで送る](#)

戸田ライオンズクラブの目の無料検診が始まったのは1973年です。その前年、クラブが結成される時に入会して会員となり、眼科医という自分の職業を生かした奉仕活動が出来ないと、無料検診を提案したんです。当時、戸田市内には眼科の開業医が1軒も無かったので、大変な反響がありました。毎年10月10日の目の愛護デーに近い日曜日に実施し、2回目からは小中学生の目の愛護ポスター展も開いています。

始めた当時は、結膜炎や角膜炎といった疾患が多かったですね。当時は感染性の結膜炎が主でしたが、現在はアレルギー性が増えて、同じ病気でも様変わりしています。これまでの受診者数は3,410人で、やはり中高年の方が多いです。初期の緑内障が見

つかった方、重度の糖尿病網膜症など重篤な病気が見つかった方もおられます。緑内障の原因ははまだ解明されていなくて、ある程度進行しないと症状が出ないタイプもあります。無料だからと軽い気持ちで来られて、初めて病気が見つかったこともあり、無料検診は早期発見につながっているんです。

2014年9月にIPS細胞を使った世界初の移植が行われて話題になった加齢黄斑変性は、私が医学生の時には存在すら知られていませんでしたが、ここ20年から30年でどんどん増えてきました。名前の通り加齢によるものですが、光刺激が原因の一つと考えられています。最近ではパソコンや、特にスマートフォンですね。子どもの頃から長時間見ていると、黄斑に対してかなりの負担になると思います。孫があんな小さな画面をじっと見つめていると、心配になってしまいます。

私は元来近視ですが、60歳を過ぎた頃に白内障の手術を受け、おかげで83歳の今も矯正視力1.2です。数年前に息子に院長を譲りましたが、今も週に2日ほど診療を担当し、月1回は主に高齢の患者さんの往診も行っています。往診をする眼科はあまり多くないと思いますが、歩くのが困難になられるなど定期的に受診出来ない患者さんが増えたので、10年ほど前に始めました。

ライオンズの無料検診は昨年10月で44回となりました。こうした活動は一人ではなかなか出来ないものです。戸田ライオンズクラブのメイン・アクティビティとしてこれまで続けてこられたのも、メンバーの全面的な協力があつたからこそと感謝しています。

2018.02更新（構成／河村智子 写真／関根則夫）



みのだ・けんせい 1934年、三重県津市生まれ。とだ眼科名誉院長。72年戸田ライオンズクラブ入会。多年にわたる臓器移植の普及啓発及び移植医療の普及・向上への貢献により、2017年11月の臓器移植推進全国大会において厚生労働大臣感謝状を贈られた。

— 歴史 —

リッチランドの壺： 海を越えた愛の光

1956年



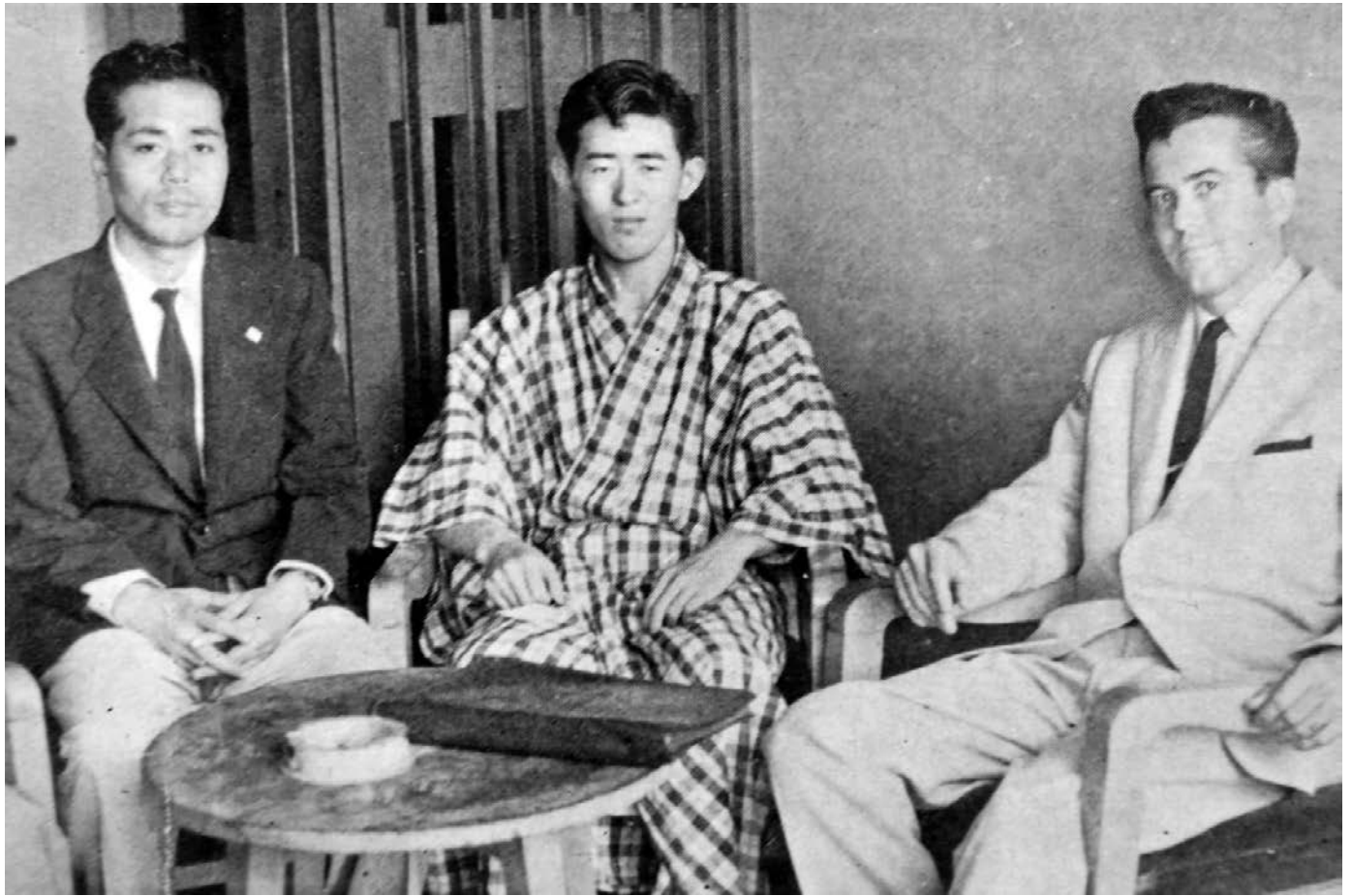
東京ライオンズクラブから青森ライオンズクラブへ贈られた「リッチランドの壺」

 シェア 0  ツイート  LINEで送る

「リッチランドの壺」というタイトルを得て語り継がれている、1956年に起きた奉仕の物語がある。一人の青年を失明の危機から救うために、国境を超えて日本とアメリカのライオンズクラブが手を携えたこの出来事は、初期の日本ライオンズを代表するエピソードの一つであり、またライオンズクラブ国際協会という奉仕団体の国際性を象徴するものだ。そして東北地方で初めて結成された青森ライオンズクラブ誕生の物語でもある。

戦後間もない頃のこと。青森市に住む青年・市川仁也は早くに父を亡くし、母と姉、弟と共に暮らしていた。経済的に苦しかったため大学進学希望はかなわず、片親であるがゆえに十分な就職口にもありつけずにいた。そんな1956年春、20歳の時、追い打ちをかけるように網膜剥離の診断を受ける。医師からは、手術を受けなければ失明すること、費用は5万円ほど掛かることが告げられた。

健康保険制度も無い時代である。途方に暮れた市川青年は、以前から通っていた青森バプテスト教会の豊原牧師に相談する。牧師は、費用のことは考えずとにかく手術を受けるように言い、市川青年はそれに従う。その費用がどのように工面されたかを彼が知るのには、手術後のことになる。相談を受けた豊原牧師は、教会のハルバーソン宣教師に青年の苦境を話した。ここから太平洋を越えた善意のリレーが始まる。



左から豊原牧師、市川青年、ハルバーソン宣教師

ハルバーソン宣教師は、第2次世界大戦でアメリカ兵として1942年からフィリピン戦線に従軍していた。終戦後、日本に上陸した彼は、あまたの悲惨な状況を目にした。戦争の無残さ無意味さにやるせない思いで東京都内を歩き回っていた時、ある教会の前を通りかかった。牧師に招き入れられ、何回か通ううち、将来の夢も無かった彼の心の片隅に牧師が示してくれた聖書の言葉が刻まれた。帰国後、彼は神学校で学び直し、宣教師として再び日本の地を踏んだ。その時には、名刺に漢字で「春場村」と記すほどの親日家になっていた。

そんなハルバーソン宣教師と豊原牧師は、市川青年の手術費を得るために青森で支援者を募り奔走した。が、戦後の復興に全力を尽くしている市民にとっては容易なことではなかった。そこでハルバーソン宣教師はアメリカ・ワシントン州リッチランドに住む母へ手紙を送り、援助の手立てを打診する。話は叔父のロバート・ハックルベリーへ伝わり、彼は所属するリッチランドライオンズクラブに相談した。

ここでも不思議な巡り合わせが働いている。リッチランド周辺では1950年代にトラコーマが蔓延。リッチランドライオンズクラブは町の子どもたちを網膜剥離や失明から守るために、検診や治療といった対策を先導していた。これが功を奏して高額な医療費を半分に抑え込むことに成功し、地域住民からの感謝を受けていた矢先、市川青年の話がクラブに持ち込まれたのだった。クラブ・メンバーたちの大きな使命感と達成感という熱の冷めやらぬ中、理事会に報告され例会に諮られた市川青年への支援は即決。わずか5分でメンバー30人から150ドル（当時のレートで5万円余）が集まった。

リッチランドライオンズクラブはこの奉仕活動を日本のライオンズの手を通じて行ってもらおうと考えた。この時はまだ青森にはライオンズクラブが無かったため、東京ライオンズクラブへ送金した。日本にライオンズクラブが誕生してまだ4年という時期に、先輩として「これがライオンズだ」と示す意図もあったのかもしれない。事の顛末を記した書簡とお金を受け取った東京ライオンズクラブは胸を打たれた。



視力を取り戻した市川青年はその後、日本通運に就職。国際的な業務を担当した

「私たちもこの活動を手伝わせて頂きたい。青森の青年の治療費は私たちが作り、リッチランドからの善意のお金はそのまま基金にしよう」

東京ライオンズクラブはリッチランド ライオンズクラブの承諾を得て、「リッチランド・アイ・ファンド」という名の視力保護事業の基金を創設。の例会場入口には「リッチランドの壺」と名づけられた壺が置かれ、メンバーたちが入れた寄付が基金に積み増しされていった。

市川仁也青年は病気の宣告から約半年後の10月、無事に手術を終え視力を取り戻した。後に、一連の出来事を知った時の思いを「私を助けるために日本とアメリカで大きな愛の輪が広がっていたことに心が震え、身が引き締まる思いがした」と語っている。人生最大のピンチを乗り越えた彼は間もなく、ハルバーソン宣教師仕込みの英語を生かせる運輸会社に就職。海運業務を担当しながら通信教育で大学を卒業し、キャリアを積んで、国際輸送コンサルタントとなって活躍した。

一方、東京ライオンズクラブは、希代の縁でつながった青森の地でクラブ結成を呼び掛け、その年の12月、東北地方で初、日本では37番目となる青森ライオンズクラブを誕生させる。青森ライオンズクラブとリッチランド ライオンズクラブは1983年に姉妹提携を結び、これを記念してリッチランドの壺は蓄えられた基金と共に東京ライオンズクラブから青森ライオンズクラブへ譲渡された。更に2000年には市川仁也が青森ライオンズクラブへ入会。現在、彼は助けを必要とする人たちのために奉仕活動に励んでいる。

2018.02更新（文／柳瀬祐子）

[シェア 0](#) [ツイート](#) [LINEで送る](#)